

リスクマップ

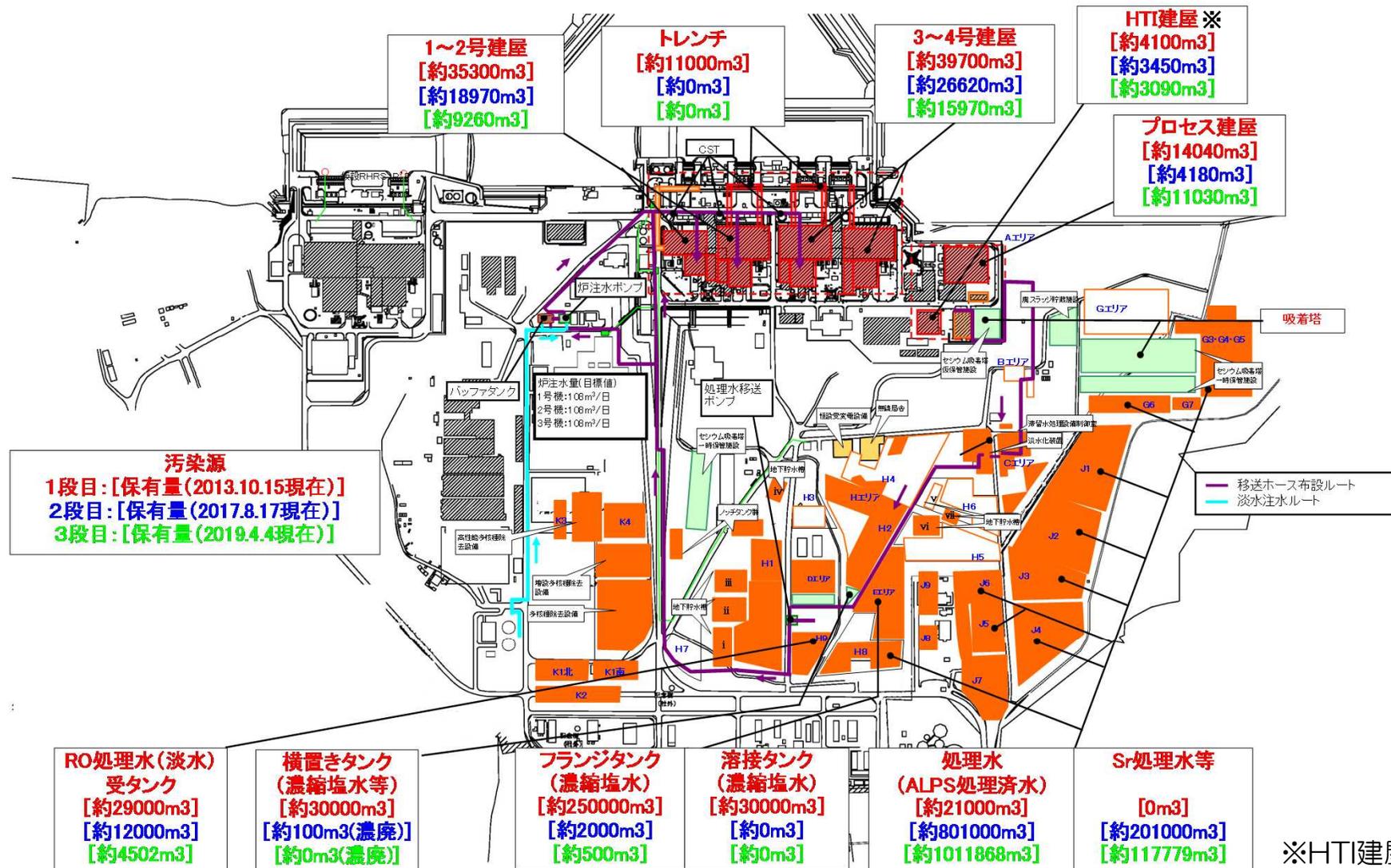
2019/5/14

TEPCO

東京電力ホールディングス株式会社

(1) 汚染水の貯蔵状況

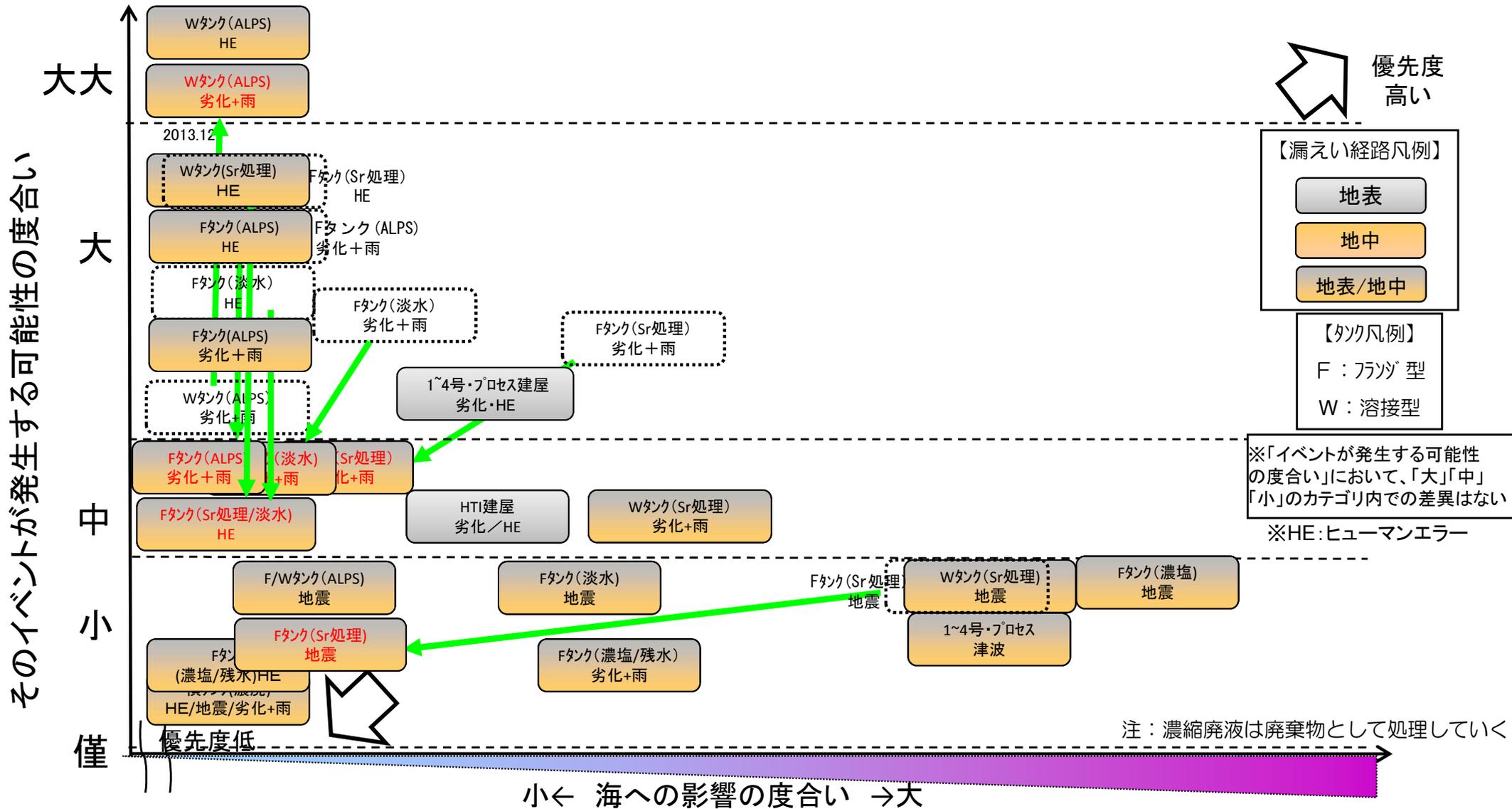
- 建屋貯蔵量：サブドレン水位低下に合わせた建屋水位低下に伴い、水量が徐々に減少。
- タンク貯蔵量：建屋内滞留水・Sr処理水の処理により処理水(ALPS処理済水) が増加。



※HTI建屋：高温焼却炉建屋

注：濃縮廃液は廃棄物として処理していく

汚染水イベント発生リスクマップ 【2017.7→2019.4の変遷】

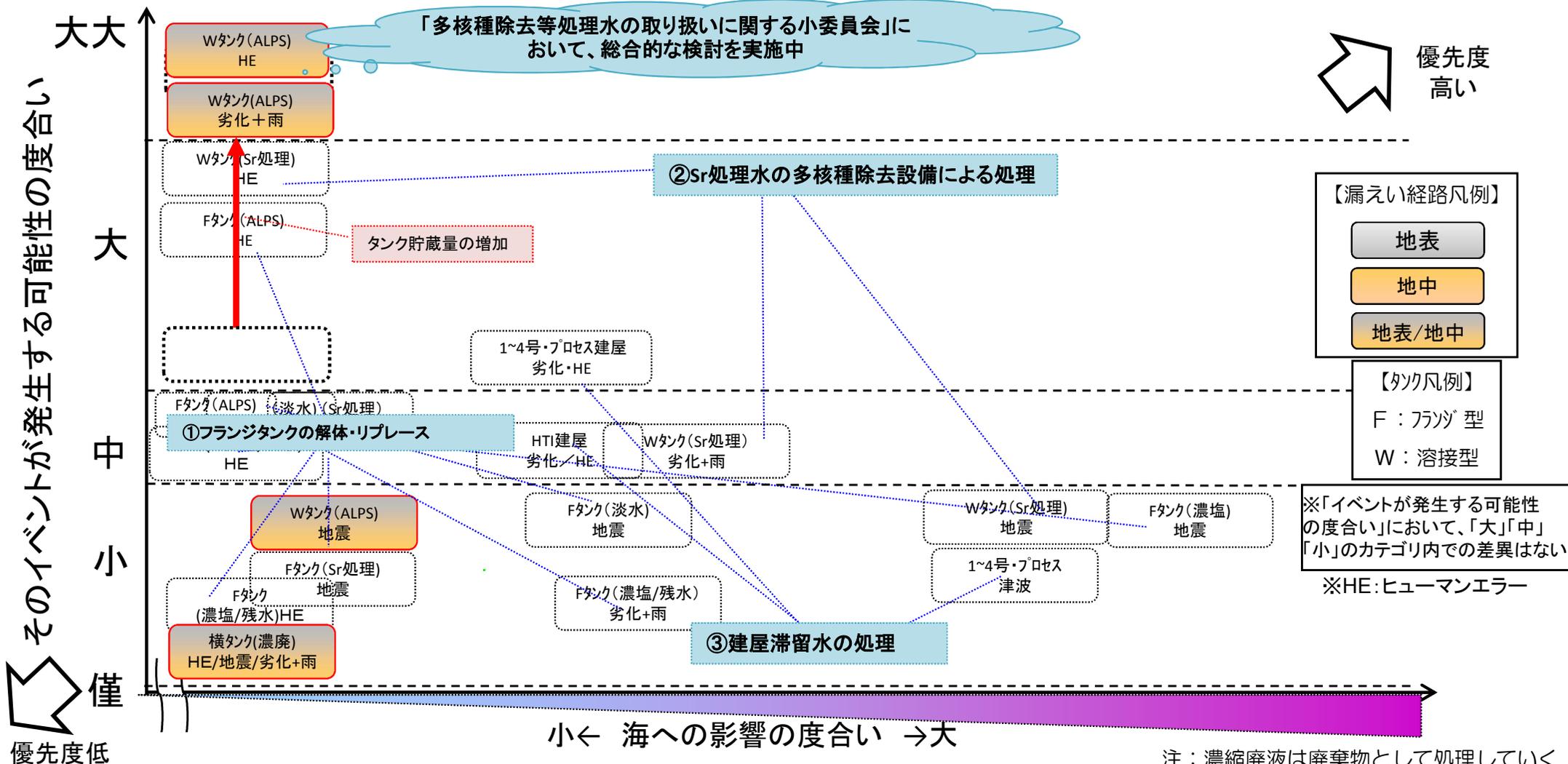


(発生する可能性の度合い) 大大: 数回以上/年、大: 数回/年、中: 数回/数十年、小: 数回/数百年

(3) 汚染水リスクマップ／今後の対策

引き続き、下記の汚染水対策を進め、汚染水リスクを低減していく。

- ①フランジタンクの解体・リプレース
- ②Sr処理水の多核種除去設備による処理
- ③建屋滞留水の処理

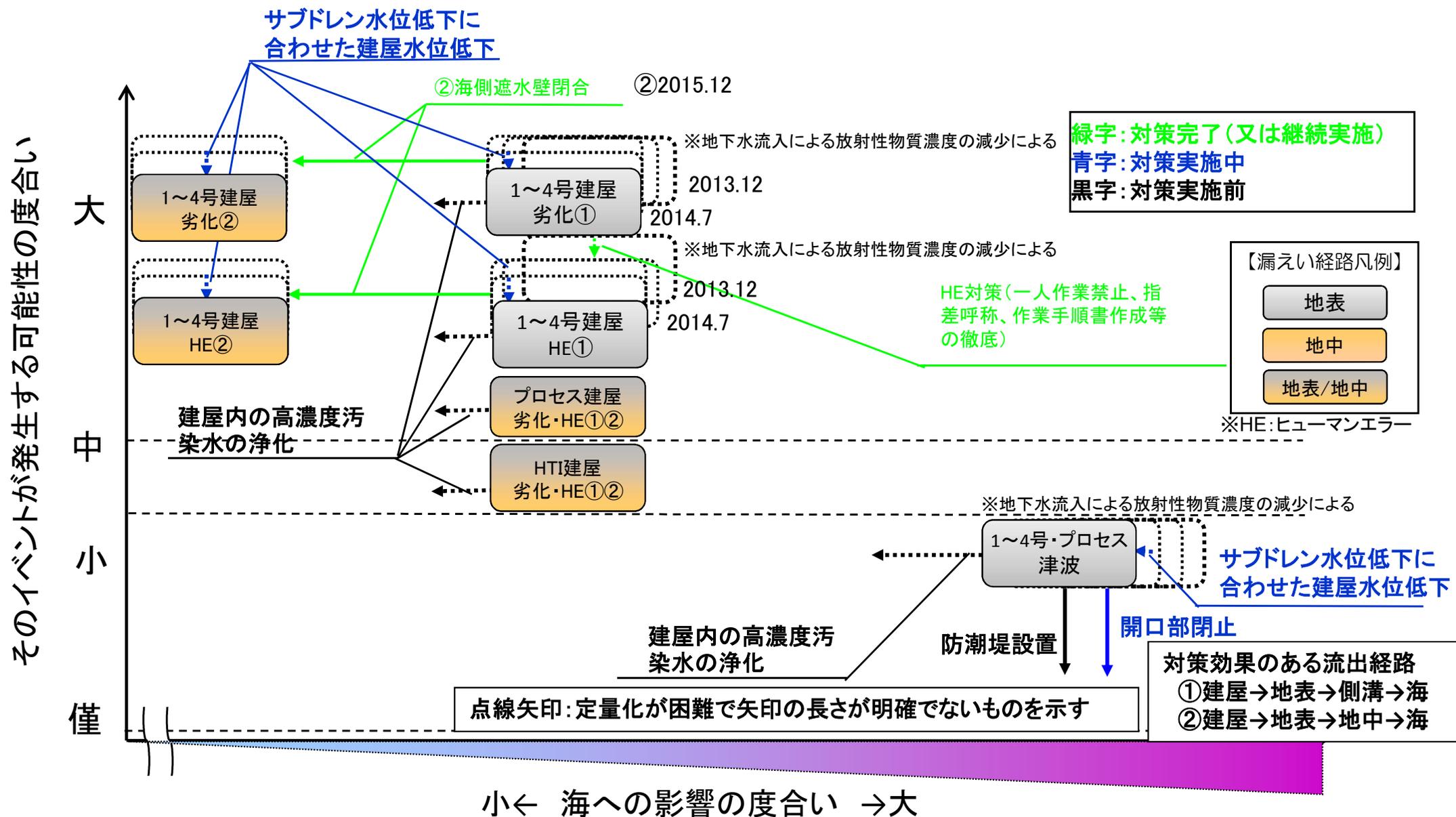


注：濃縮廃液は廃棄物として処理していく

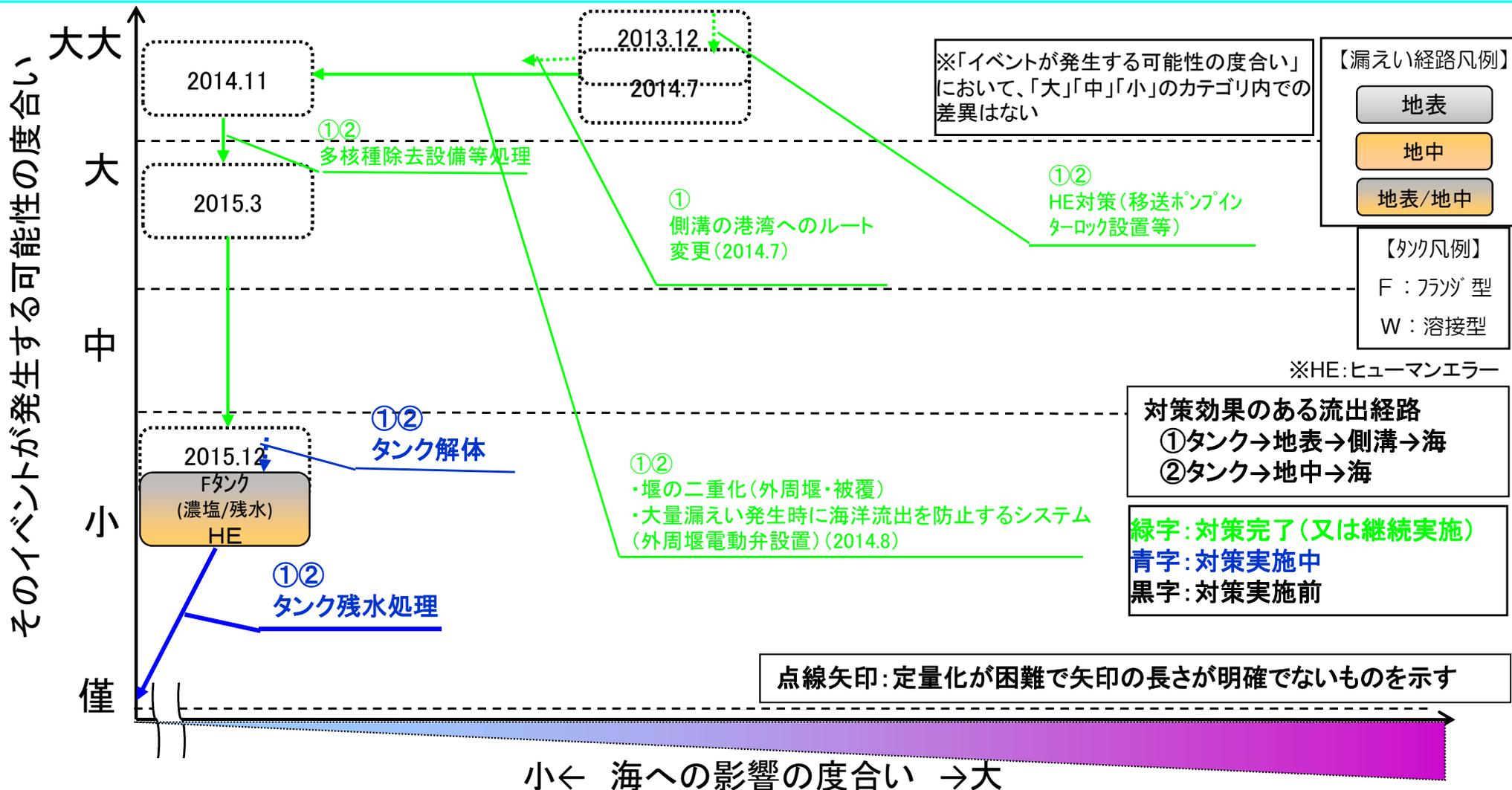
- これまでの各対策の進捗状況に鑑み、リスクの低減状況を評価した。
- 以下の貯蔵箇所について、漏えいが発生するイベント（経年劣化、ヒューマンエラー、地震、津波等）毎に実施された対策の効果をリスクマップを用いて評価した。

No.	貯蔵箇所
①	建屋
②	フランジタンク（濃縮塩水）
③	横置きタンク（濃縮廃液）
④	フランジタンク（ALPS処理水）
⑤	溶接タンク（ALPS処理水）
⑥	フランジ／溶接タンク（Sr処理水）

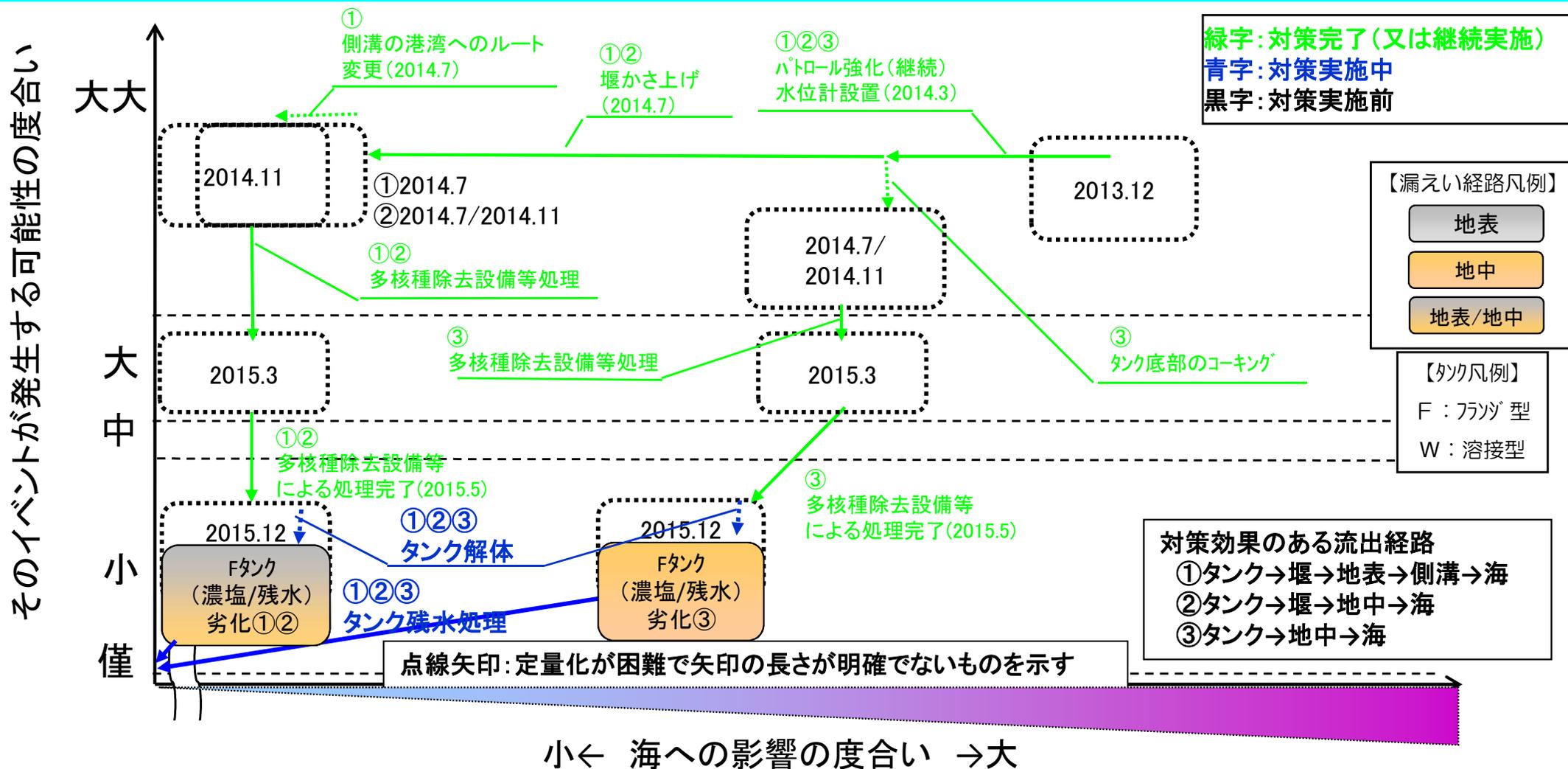
■ 1～4号機建屋については、サブドレン水位低下に合わせた建屋水位低下に伴い、水量が徐々に減少。



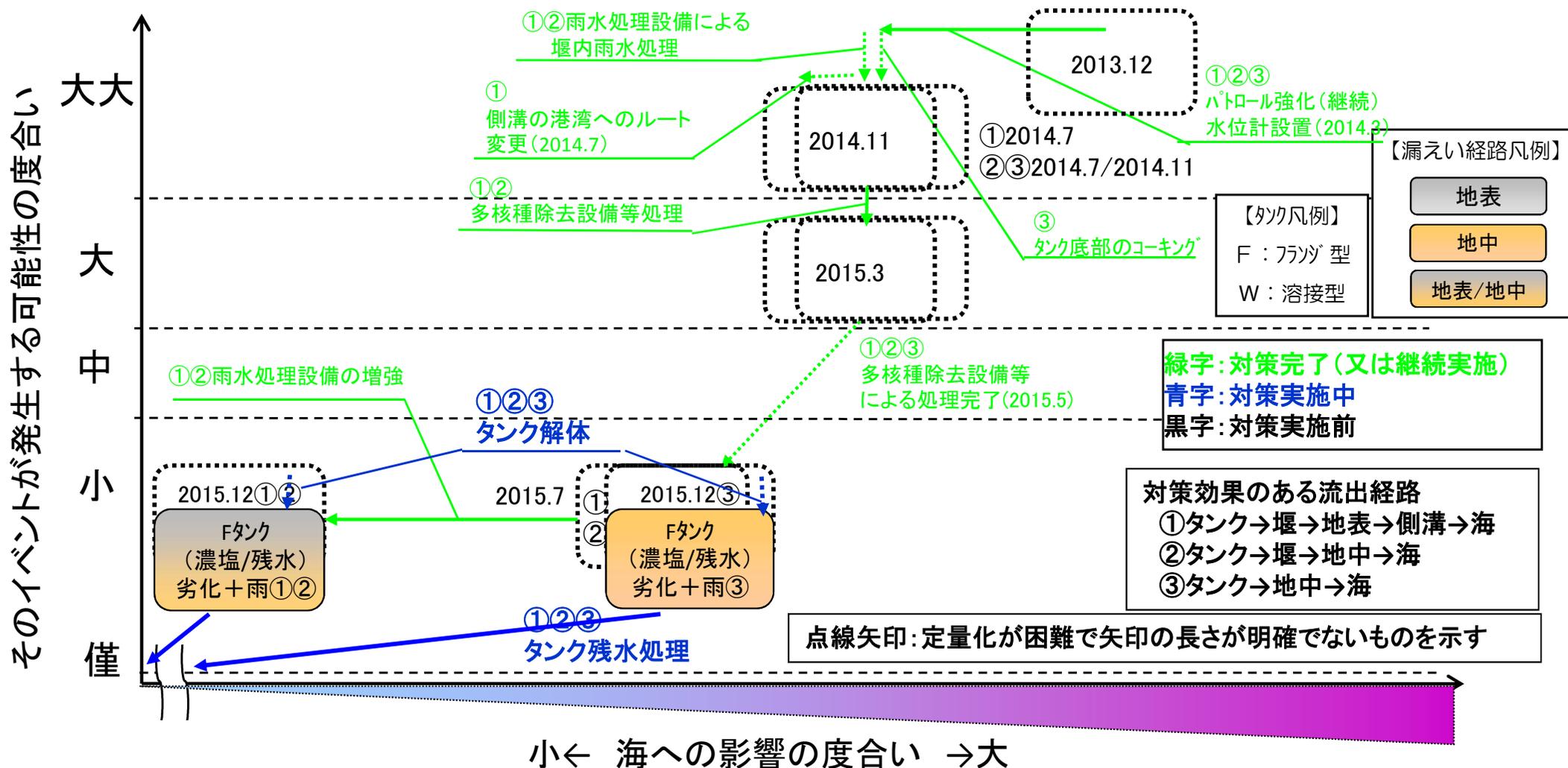
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了。
- 残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理。
- フランジタンク解体の進捗により、フランジタンク基数が減少。



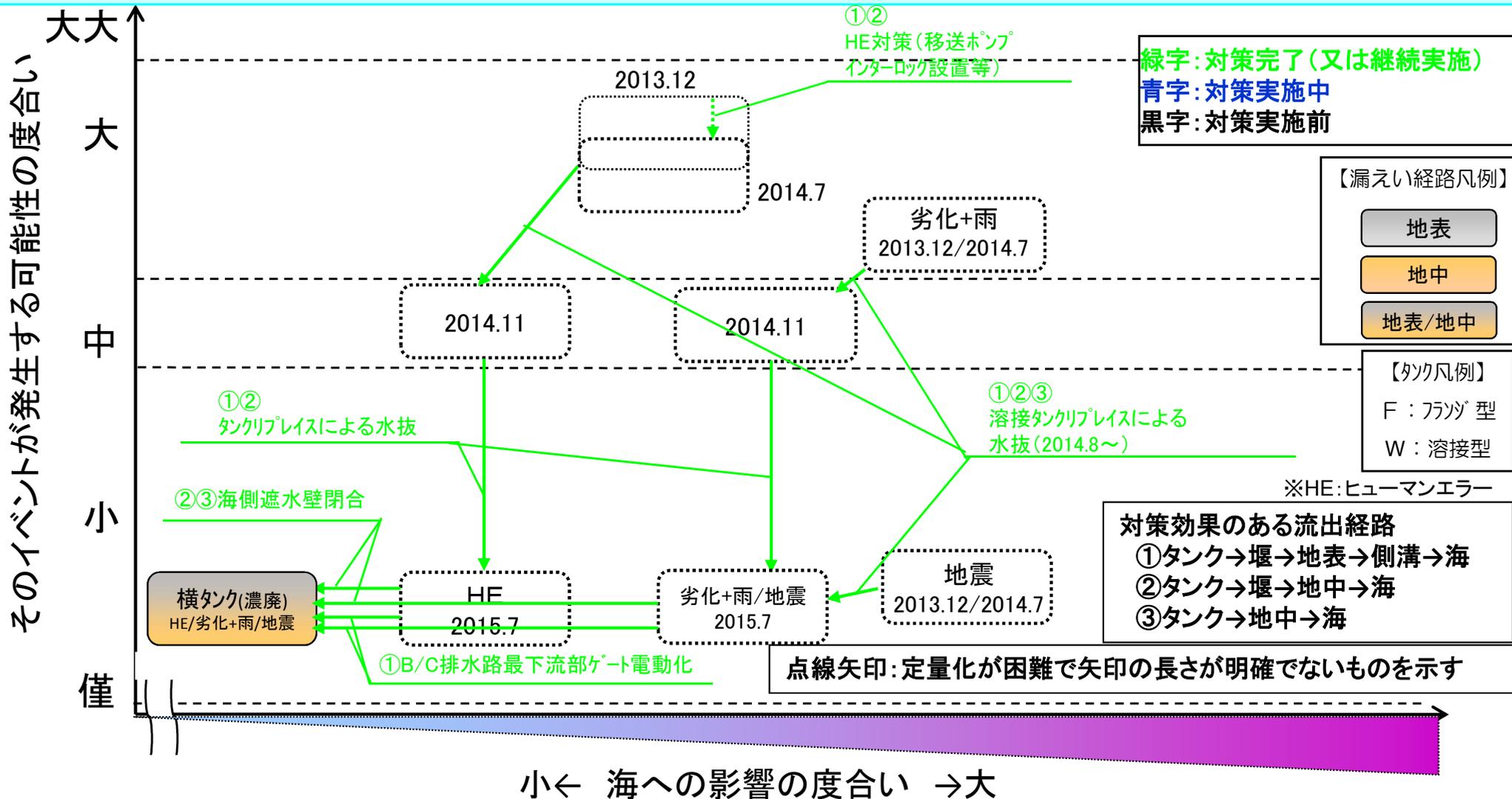
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了。
- 残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理。
- フランジタンク解体の進捗により、フランジタンク基数が減少。



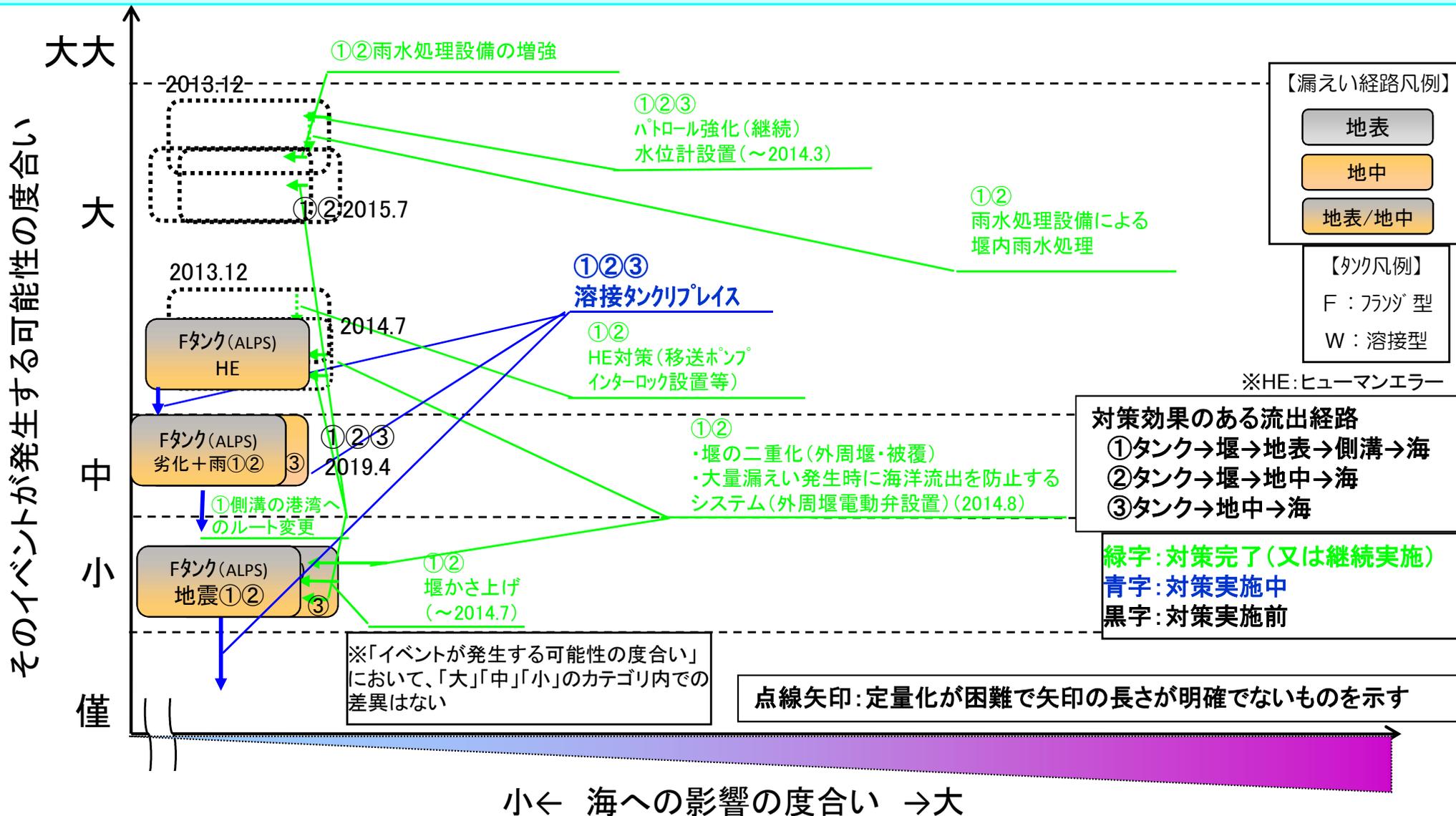
- 多核種除去設備やその他の浄化設備により、タンク底部の残水を除き、2015年5月に濃縮塩水の処理が完了。
- 残水処理にあたっては、安全を最優先に考え、ダストの飛散防止・被ばく防止対策等を十分に施しながら、タンク解体時に順次処理。
- フランジタンク解体の進捗により、フランジタンク基数が減少。



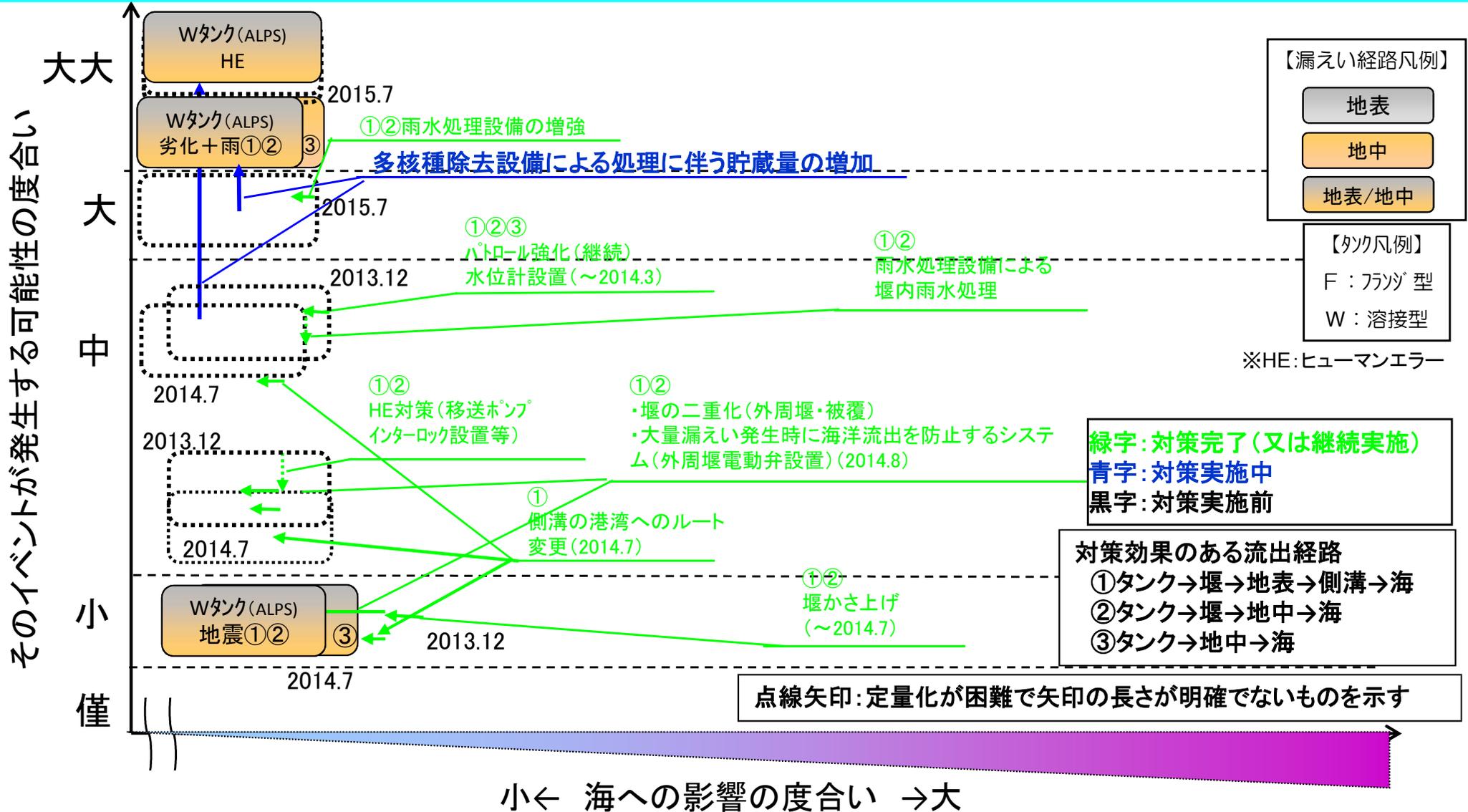
- 横置きタンクよりポンプでくみ上げ可能な汚染水を除去し、タンクの撤去を実施中。
- 海側遮水壁の閉合により、地中を経由し護岸付近の地下水から海洋への流出が抑制。
- B/C排水路最下流部のゲート電動化により、地表での大量漏えい時の海洋流出が抑制。
- 残留するスラッジ分は、水処理二次廃棄物と同等の管理とする。



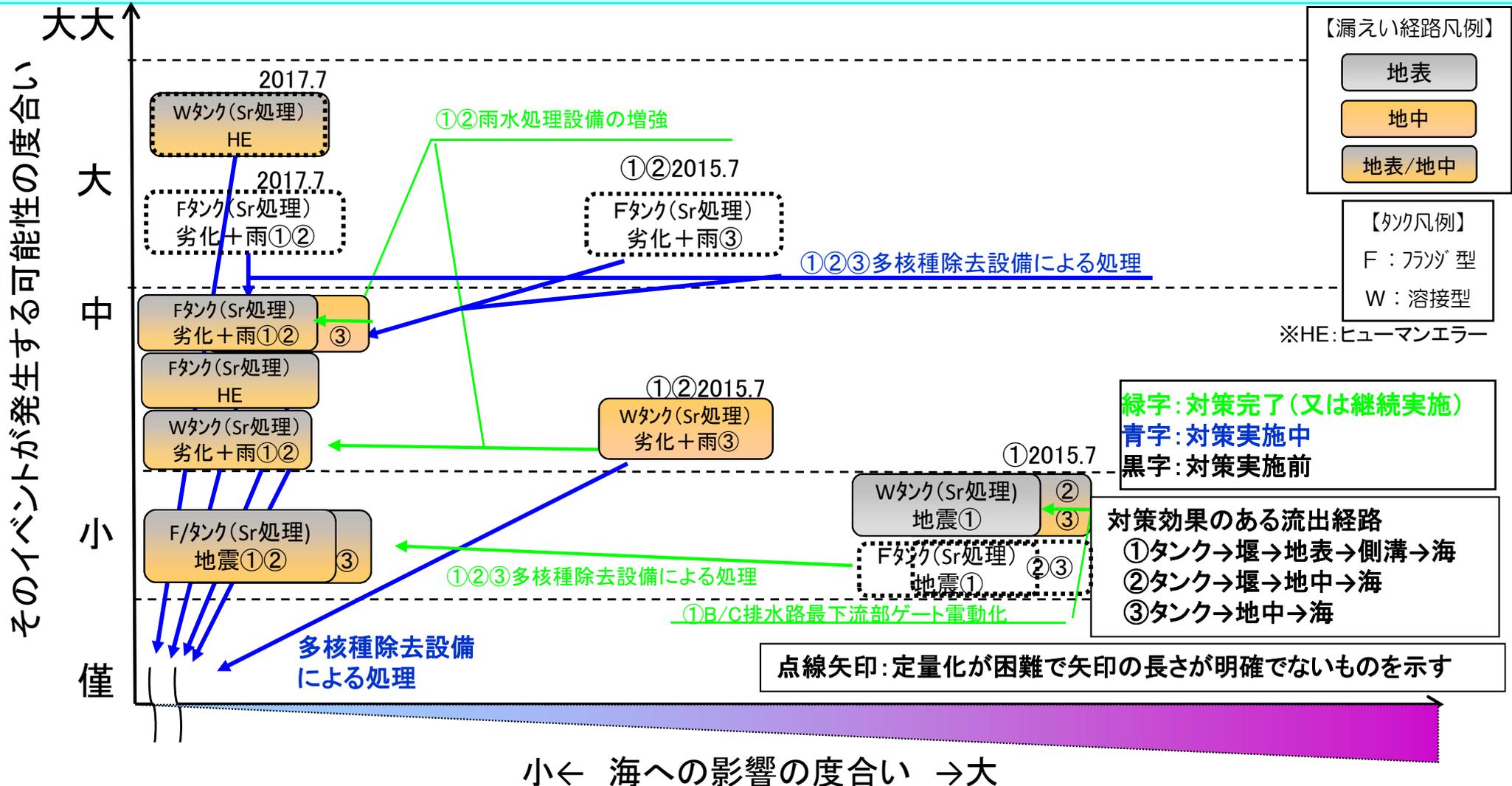
- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減。
- タンクリプレイスにより、劣化による漏えいリスクを低減。
- 2019年3月27日にフランジ型タンク内のALPS処理水の移送を完了。



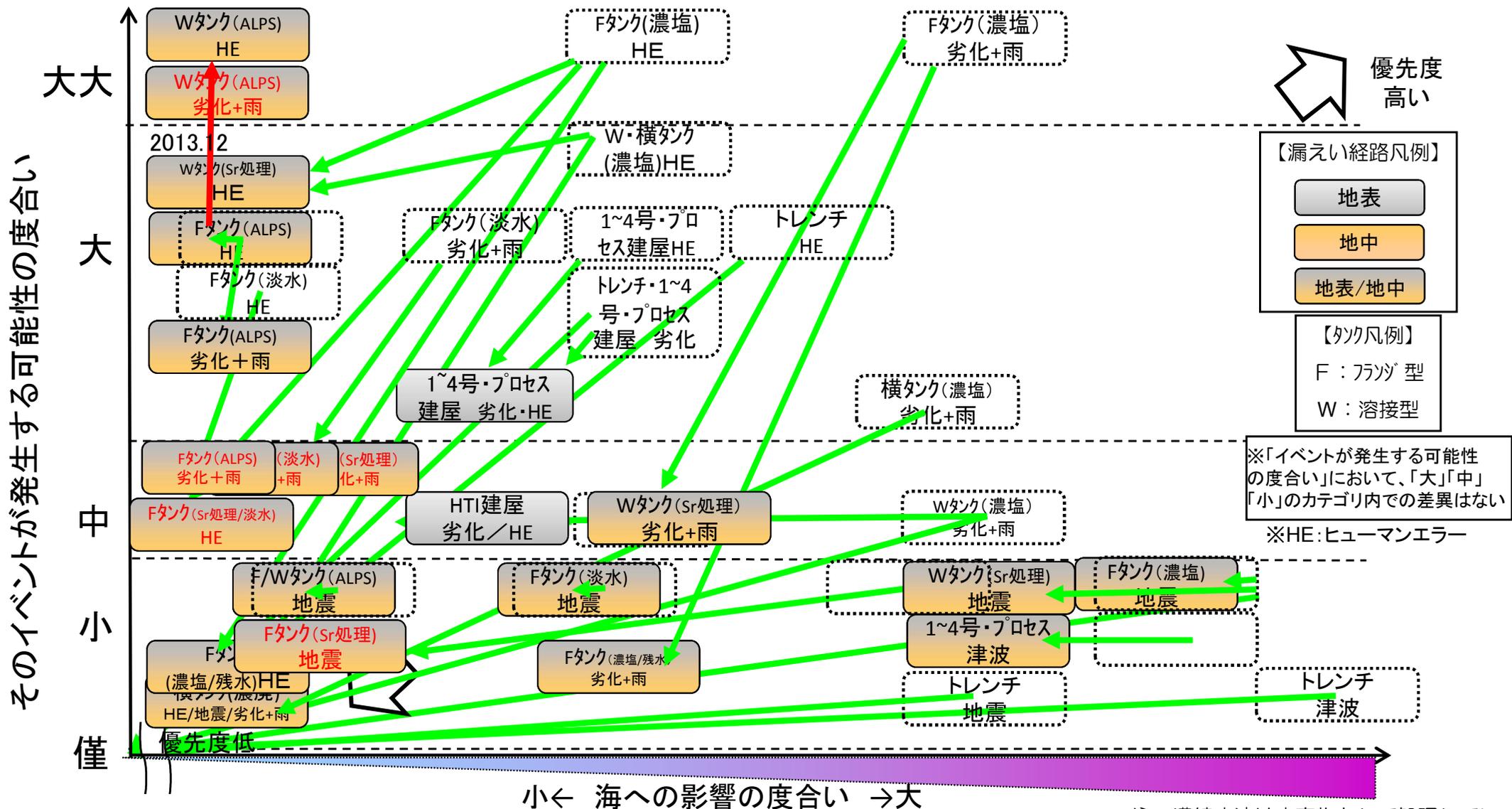
- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減。
- ストロンチウム処理水の処理に伴い、継続的に処理水貯蔵量が増加中(イベント発生可能性の度合いが増大)。



- 雨水処理設備の増強により、降雨時の漏えいリスクが低減。
- B/C排水路最下流部のゲート電動化により、地表での大量漏えい時の海洋流出が抑制。
- ストロンチウム処理水については、多核種除去設備で再度処理を実施中。
- 2018年11月にフランジ型タンクのストロンチウム処理水の浄化処理を完了。(残水処理を実施中)



汚染水イベント発生リスクマップ 【2013.12→2019.4の変遷】



注：濃縮廃液は廃棄物として処理していく
 (発生する可能性の度合い) 大大: 数回以上/年、大: 数回/年、中: 数回/数十年、小: 数回/数百年